

大庭先生を想う

経営学部長 岩田伸人

2006年の1月、その日は朝から肌寒い天気、空は灰色だった。私は家内とともに自宅近くのファミリーレストランで珈琲を飲んでいて、窓の外に目を向けると、黒っぽいスウェットの上下を着て、やや前屈みで歩いている人が見えた。直に大庭先生だと分かった。店内から手を振ったら、こちらを向いて例のごとくニヤッと笑顔を見せられた。私は、慌ててレストランの外に出た。「大庭先生、散歩ですか?」、「やあ、そう、これから井の頭公園まで、…。岩田さんはご家族と一緒になの?」、「はい、家内と一緒にです。」、「…じゃあ、また…」と手を振って、大庭先生は、そのままサッサッと真っ直ぐに吉祥寺方面へ、再びやや前屈みの格好で歩いて行かれた。

私が生前の大庭先生を最後に見たのがあの時だった。

同年の4月に訃報を聞いて、私は直に先生の書かれた著書「メシアは夢か幻か」と「社会倫理と霊性」(新教出版社)をインターネットで購入した。

1997年、私と大庭先生は、一緒に青学の経営学部に赴任した。同じ九州生まれで七歳年上の大庭先生に、私は何かしら魅かれるものを感じた。日曜日の長崎、佐世保教会で先生の説教を伺った日のことも鮮明に記憶している。

同教会の受付で記帳して中に入ると、奥様がオルガンを奏でられて、敬虔な信者の方々を前に、大庭先生のお話は厳肅な雰囲気を保ちながらも、佐世保の博識で敬虔なキリスト教徒の方々に、強い畏敬の念を抱かせるのに十分な気迫のこもった内容だった。

その日の午後、大庭先生は佐世保市の小高い丘の上にある和食のレストランに私を招待して下さった。日本酒がお好きな大庭先生は、食通でもあった。

でも当時から、先生の御体調は決して良好とは見えなかった。青学に赴任された当初は、ご家族のお住まいがある長崎から、吉祥寺の近く(井の頭線「三鷹

台駅)に単身で住まわれていた。その近くに大庭先生の馴染みのドイツ家庭料理を食べさせるお店があった。ご一緒させていただいたその店もその後に閉店し、今は跡形もない。先生がゼミの学生達と通われたレトロ調のジャズ喫茶店は、西荻窪駅の商店街裏道にあったが、こちらは多分まだ営業しているはずだ。

先生が馴染みにされていた店の幾つかは、カウンター付きで一杯を数百円で飲める安い個人営業の、お世辞にも綺麗とは言えない内装だった。私は、一度だけ大庭先生を自宅近くのショットバーにお誘いしたことがある。でも、その店はやや清潔すぎて大庭先生の嗜好に合わなかったようだ。

あるとき、居酒屋で大庭先生と御一緒させて戴いた際、スイスのジュネーブ市内にあるウェスレーに縁のある教会を訪問する予定だと私におっしゃった。それを聞いて私は驚いた。というのも、私自身も研究分野(国際貿易)の関係でジュネーブの国際機関を幾度か尋ねて行った際に、その教会に何度も足を運んだことがあり、場所や教会内の雰囲気にも慣れ親しんでいたからだ。

「大庭先生、その教会は、私も行ったことがありますよ。ジュネーブの町が一望できる高台の教会ですよね」。

大庭先生は、御生まれが北九州門司で、御若い時に病気でかなり長期に入院されていたこと、地元の港湾施設で荷受の肉体作業をしながらも、キリスト教の信仰を深める生き方をしてこられたこと、長崎・佐世保の教会で牧師をされていた頃は、よく信者の方々が人生相談に夜遅くまでご自宅に屯されていたこと、などを話して下さった。そのようなお話を聞くにつれて、私は、大庭先生が「真のキリスト教徒」として、神の道を堂々と真っ直ぐに歩まれていることを感じた。

大庭先生は、爽やかな風のようにいながら、人生の嵐にも怯むことなく自分の信じる道を黙々と歩まれたんだな、と今は懐かしく思えるようになった。大庭先生とは、是非また会いたい。いつか、どこかで。その時は、キリスト教徒ではない私も、自分が歩いて来た道を指し示しながら、「大庭先生！私も後から歩いてきたんですよ。」と気楽に声をかけたいと思っている。

(2008年2月5日記)